

## 曹禺「王昭君」の孫美人について

坂 野 学

### はじめに

曹禺の最後の話劇「王昭君」は、制作目的が政治宣伝であることを嫌われて全体的評価は高くないが、それでも第一幕と第二幕のストーリー展開は他の作家の追従を許さない優れた部分だと高い評価を得、とりわけ第一幕における架空の人物孫美人の人物造形はおおかたの絶賛を獲得している。この作品において、純粹に文学的な価値尺度で考察しうるのはまさに孫美人を中心とした第一幕にある。他の部分はこの作品が担った政治的役割の色が濃いので、おのずと別の尺度でもって考察されるべきである。

小考はひとまず、この孫美人の描写に焦点を当てて、いささか気になる問題点について言及したい。



「王昭君」第一幕は、漢元帝の竟寧元年(前33)四月、後宮での一日、王昭君が和番公主として匈奴に降嫁することを決心することになる場面を描く。その描き方は、複線になっていて、主要人物が抱くそれぞれの期待という面に即して整理すれば、①王昭君が匈奴に降嫁することになるという展開。②姜

夫人の期待で、王昭君が美人に封ぜられてより確固とした地位を築くという展開。③孫美人の「期待」で、皇帝との「召見」がかなうという展開が、同時進行している。①と②は背反する展開で、①が実現されれば②は実現されず、②が実現されれば①は実現されないという関係になっている。そして③は①②とは本来関係のない独自のストーリーである。

読者（観客）がまず知らされるのは、姜夫人の内部工作によって王昭君の「美人」昇進が内定したことである。ただそのことは他の登場人物には知らされず、隠されたままになる。読者だけが②の実現化が進んでいることを知るばかりである。①については、第一幕の後部になるまで、この十日前に王昭君が朝廷に降嫁を請願していたことが登場人物と読者に隠され続ける。開幕早々からの王昭君の態度や王昭君と姜夫人との諍いの真相はずっと読者から遠ざけられていたわけである。

①と②の展開が舞台上で表現されないかわりに、③の孫美人の皇帝との「召見」というストーリーが舞台上に現れて、それが①②を巻き込んでいくことになる。

結果から先に言えば、③の実現は本来ありえないのだが、奇跡的に「実現」してしまう。そのとき、背反関係にあった①と②も同時に実現してしまうことになる。この背理を収束するのが王昭君自身の意志決定であり、当初実現の見込みが知らされていた②ではなく①の実現というどんでん返しで幕を迎える。

以上、第一幕の構成を複線を中心に概括したが、孫美人という架空の人物は、主線①も副線②もその展開が隠されるという特異な話法の中で、構成上要請された重要な配役であることがわかる。

では、孫美人とはいかなる人物として設定されているのだろうか。巻頭の人物表には「孫美人——六十数歳。漢宮の「美人」とあるが、最初の登場の場面は次のようである。

隣から孫美人の弱々しい低い歌声が聞こえてくる：

「北方に佳人あり、世に遺されてひとり立つ。……」

熟練した琵琶の音をともなって、清らかに響く。

盈盈：隣で孫美人が歌っていますよ。

歌声「ひとたび振り向けば城が傾き、再び振り向けば国が傾く。  
……」

王昭君：歌が本当にお上手ね。まるで少女のよう。

盈盈：少女ですって？彼女は六十すぎですよ。皇帝のことを四十年以上想いつづけて、それですっかり頭がおかしくなっちゃたんですよ。道理からすれば、順番が来ているはずなのに、どうしてまだ順番が来ないんでしょうね。

姜夫人：それを「順番はずれ」と言うんだよ。順番外なんだよ。順番になったとか、順番じゃないとかに彼女は入ってないのさ。盈盈、おまえは口が多いよ。……<sup>(1)</sup>

盈盈の言う「她六十多歳了。她想了皇帝四十多年了，都想成了瘋子了」からすると、年老いて頭がおかしくなったというように理解するのが通常だろうと思う。

関抗生は宮廷を「監獄であり、死刑場であり墓場」だとして、そこで誰よりも長い間生活している孫美人の苦しみの深さを言及している。<sup>(2)</sup> また、ある評者は封建社会の残酷さが孫美人の精神も破壊してしまったのだと激しく非難している<sup>(3)</sup>。

ところで、孫美人の様子はその後の第2回めの登場の場面でト書きに説明されている。

孫美人登場。孫美人はすでに六十数歳の宮女。彼女の服装は五十年前の女官の装いのままで、しとやかで物静かにしていて、あでやかに装っ

ているが、まったく場違いな感じをあたえない。彼女の頭髪は完全に真っ白なのだが、彼女の気持や態度は、やはりもの静かで好ましく想われる少女のようだ。彼女はあたかも地下の宮殿から掘り出された女性のように、言葉遣いや身なりはすべてその場の人たちとは異なっている。しかし、彼女は少しも気づいていない。彼女は自分の世界に生きている、うららかな日差しが永遠に差し込んでいるような、皇帝のお召しを待っている世界の中に生きているのだ。<sup>(4)</sup>

ここに説明された孫美人の容貌をどのように理解したらいいのだろうか。髪が真っ白である以外は老人性が見当たらない。あでやかに装っているということが、あるいは老けた顔や肌を隠すために厚化粧しているということなのかもしれないが、それを裏付けるものはない。少なくとも、王昭君は孫美人について「きれいだ（好看）」と言っていることからすれば、髪以外は相当若く見えるのではないかと想像する。長年の幽閉生活の苦痛があちこちに刻印されているという態ではないことは明らかだろう。一部の評者は、白居易の「上陽白髪人」の詩句にもとづいて、幽閉の苦しみに言及しているが、正しいとはいえない。<sup>(5)</sup>

譚然文が座談会の席で、孫美人といえばディケンズの「大いなる遺産」の花嫁の婚礼服を着た老婦人を思い出す、と語っているが、いい連想かもしれない<sup>(6)</sup>。そのミス・ハヴィッシュムというのは結婚式当日に婚約を破棄されてから、偏執症のようになり、時計の針を婚約破棄前に戻し、その時のままの部屋でずっと過ごすようになった老婦人である。ただ、「大いなる遺産」には婚礼服の下のはきはきした体は「しぼんで骨と皮ばかりになってしまっている」<sup>(7)</sup>と書かれているので、孫美人と同じではないが、時を止めたという点で類似しているのかもしれない。

もう一度振り返ってみよう。「她想了皇帝四十多年了，都想成了瘋子了」とはどういうことだろう。皇帝の何をどう想っていたというのだろうか。一日

も早く殉葬されたいと願いつづけたわけではない。六十歳を越えてもまだ皇帝の召見を心待ちにしているわけだから、皇帝の崩御を認められないことをもって不正常とみなせば、年老いてからおかしくなったのではない。「她天天夢著萬歲宣召她，天天打扮得這樣好，五十多年了」<sup>(8)</sup>でも同様、ここでは五十年以上になるが、皇帝の崩御をずっと認めていないということになる。

つまり、皇帝の崩御の時に、あまりの衝撃にその事実を認めることを拒否して精神が不正常になったと考えるのが道理ということになる。孫美人にとって、皇帝の崩御とそれ以降の時間というものは存在しない。非合理なことだが、髪は時間の経過を体現しているが、その他の体の部分は時間の経過の影響をあまり受けていないようなのだ。長い幽閉による苦しみなどは、孫美人自身は感じたことがないと言うべきだろう。

孫美人は劇中で十九歳だと自認しているので<sup>(9)</sup>、十九歳の時に皇帝が崩御してそれ以来異常を来したのである。元平元年（前74）四月、昭帝の崩御のときである。

上にあげた「盈盈：…。道理からすれば、順番が来ているはずなのに、どうしてまだ順番が来ないんでしょうね。／姜夫人：それを「順番はずれ」と言うんだよ。順番外なんだよ。順番になったとか、順番じゃないとかに彼女は入ってないのさ。」の部分が示唆することを以下に指摘しておきたい。

孫美女の描写が歴史事実と合致するかどうかを考察した李延先は、昭帝から元帝のかけては後宮の大整理が行われ、後宮や園陵から子供のない女性を解放したこと、また頭がおかしくなった者を何年も宮廷内においておくことはありえないこと等々をあげて、孫美人のような美人の存在は歴史事実としてはありえない、と指摘している。<sup>(10)</sup>

あくまでも虚構のなかで、曹禺は孫美人を不正常者だから殉葬の対象から

外されたのだと理由づけて、それだから六十歳余りまで園陵で生活していると設定している。朝廷側の配慮ということにも曹禺の筆は届いている。それとともに、孫美人が登場したときから、殉葬にされることはありえず、死後に園陵に埋葬されるという運命がのこされているだけと設定されていたことに留意したい。

## 二

長年の幽閉生活の苦しみ云々ということを孫美人に見いだすことについては同意しないが、閔抗生が孫美人の三回の登場について「王昭君に前人の失敗を照らし出す鏡のようだ」と指摘していることには同意したい。<sup>(11)</sup>

孫美人と王昭君の類似性については劇本中にいくつも見出せるが、その類似性を最も濃厚に表わしているのが、両者の生誕にまつわる逸話であろう。

孫美人については、

「她母親生她的時候，夢見日頭撲在懷裡，才生下她來。選進了後宮，全家都說她定要當皇后的。」（母親が彼女を産むときに、太陽がお腹に入ってくる夢を見てそして生まれてきた。後宮に選ばれて入った時には、家族全員必ず皇后になるはずだと言った）<sup>(12)</sup>

王昭君については、

「你生下来，滿屋噴香，月亮扑在你妈的怀里，才有了你。看相的说，你是天上的，命定要当皇后的。」（おまえが生まれてくるときには、部屋中にいい香りが噴出して、月がおまえのお母さんのお腹に入って、そうして生まれてきたんだ。占い師は、おまえは天上の人で、必ず皇后になる運命にあると言ったんだよ）<sup>(13)</sup>

両者が直接深く関わり合いをもつのは、孫美人の二回目の登場における池辺の場面からで、その後すぐに孫美人は王昭君の寝室に入り込み、皇帝の召

見のための装いにまるで自分のものであるかのように王昭君の装飾品や紅羅裳を身につけていくことになる。

その点でも、池辺の場面は転回点としての重要な契機を含んでいると思われるのだが、交わされる会話の含みが今一つ明瞭ではない。

孫美人：（水を指さして、含みをもたせて）これは何？

王昭君：池の花でございます。

孫美人：ちがう、（指さして）これよ。（ゆっくりと王昭君を振り向いて）  
水面にあるのは花？ それとも私？

王昭君：（同情して）あなたでございます、孫美人。

孫美人：（春の池を見渡して）花は、きれいなの？

王昭君：（はっと気づいて）あなたがおきれいなのでございます、孫美人。  
盈盈：（笑いながら）花はあなたの美しさにはおよびません。

孫美人：ほんとうですか？

王昭君：これの言うことは本当でございます。盈盈！（目で盈盈に合図する）

孫美人：（王昭君に）賢い娘ね、あなたは物わかりのいいお嬢さんです、琵琶は弾けるの？<sup>(14)</sup>

関抗生は、この池辺の場面を孫美人の「敏感、妄想、執拗な自信」という三つの異常心理を表現した部分であるとして、次のように説明している。

「…。彼女（孫美人―筆者注）はこの世界に対して現実感が極めて乏しい、たまたま現実的な感覚があっても、彼女には、花火の一瞬の輝きに過ぎず、たちまち消えてしまう。こうした幻想の世界の中では、彼女が見る自分の姿は、実のところただ過去の美貌の「回憶」にすぎない。時には、彼女でもあまり自信がもてなくなることがある。自分の自信を揺るぎないも

のにするために、彼女は「ずる賢く」ほかの人の反応を探ってみる。」<sup>(15)</sup>

水面を指さして「これは何」と尋ねた孫美人の心理を、時に感じることになる自分の美貌への不安だと関抗生は説明する。水面に映った自分の顔貌を見てふとそこに年齢による衰えを感じてしまった孫美人は、それを否定するためにわざとそばにいる王昭君に映っているのは「花なのか私なのか」という二者択一を迫り、勢い「私」としか返答できない状況を作り出す。果たして王昭君は孫美人の真意を見抜いて、映っているのは孫美人だと答えて、孫美人の満足を得ることになる。

その場合、孫美人の言う「聰明的好姑娘，你是個明白的姑娘」は何を意味しているだろうか。孫美人の容貌に美貌の衰えを認めながらもそれを口に出さなかった王昭君への感謝と称賛とみなされようが、同時に孫美人にとっては美貌の衰えの追認にもなる。異常心理を持つ者のコミュニケーションとして論理の整合性を求める必要はないのかもしれないが、今一つ腑に落ちてこない。

ここで敢えて想像をゆるしていただいて、池辺の場面の行動を振り返ってみたい。その際に重要なのは、池辺の場面の後に出てくる身支度の場面で明らかのように、孫美人には鏡に映る実際の自分の姿は見えていないということだ。おそらく、孫美人は鏡を通して常に十九歳のころの黒髪の美しい自分の姿を見ていたに違いない。

件の場面。「お手をお貸ししましょうか」と申し出た王昭君の補助を断わった孫美人はひとり池辺に進みしゃがみこんで水面に顔を映す。補助を断われたとはいえ心配な王昭君は手を出さぬまでも孫美人のすぐ後ろで見守っていたことであろう。

孫美人が指さして「これは何」と尋ねたのは、尋ねなければならないものが水面に映っていたからである。王昭君はその指さすあたりに花と孫美人の姿を見たに違いない。しかし、自身の姿を何と尋ねるわけがないから、「花」



と答えた。ところが、「ちがう、これ」と指さして、孫美人はゆっくりと王昭君の方を振り返る。そして言う「花、それとも私」と。鏡を介しての視線の交差というよくある場面を念頭に置いて考えれば、王昭君が孫美人の姿を認めていたとすれば、孫美人はその指先に王昭君の姿を見ていたことになる。ゆっくりと振り返って王昭君の方を見るこの動作は、映っている姿が誰かを確認する行為だと見て取るのが常識的なはず。おそらく「それとも私」という台詞がなければ、観客は振り返るしぐさをそのように暗黙の内に解するはずである。

台詞の論理的整合性を問わず、行動の象徴性をとりあげるならば、水面に映る「二つ」の十九歳の女性の姿を前にして取り違えが生じたということである。敢えて踏み込んで言えば、同じように見える二つの姿の少し美しく感じられる方を指さして、それが孫美人の方であることを認めさせた。孫美人は王昭君の答えに満足するとともに、王昭君が位の低い者として謙虚な態度を示したことをほめたのだろう。それが「聰明的好姑娘，你是個明白的姑娘」の含むところであり、「你很美，很好看，真是一個很好的姑娘呢」と率直に王昭君の美しさを愛しむことになる経緯ではないだろうか。

皇帝の召見に向う孫美人がお別れに、「我要是得了寵，我在皇帝面前不會忘記你，我是不嫉妒你的。」（もし寵愛を得ても、私は皇帝の前であなたのことは忘れません、私はあなたに嫉妬するような人じゃないんですよ）と言うのも、池辺の場面で孫美人が王昭君に美しさを感じたことを物語っている。

第一幕の劇構成について再度言えば、この節でみたような池辺における孫美人と王昭君の「取り違え」を転回点として、孫美人の運命劇と王昭君の運命劇が幕落に向って遁走曲のように慌ただしく進行していくのである。

### 三

一において、孫美人が異常を来したのは年老いてからではないことを示し

た。その時点を昭帝の崩御した時で、孫美人が十九歳の時だと定めた。しかし、そのように確定することで劇本の細部まで説明しきれわけではない。たとえば、孫美人が王昭君にあたえる最後の言葉もなかなか理解しづらい。

「孫美人 我好看嗎？我要走了。好姑娘，我告訴你一件心事。我實在是二十了。我瞞了一歲，誰也不能說，瞞歲數是要殺頭的。（私はきれい？もう行きます。お嬢さんに、私の心配事を教えましょう。私は本当は二十歳なんですよ。一歳ごまかしているの、誰にも言わないでね、歳をごまかすのは打ち首ですからね）」<sup>(16)</sup>

歳をごまかさなければならなかった理由も明らかにされないし、またどうして最後にこんな秘密を王昭君に打ち明けないといけないのかの理由もよくわからない。

孔盈は前者の理由を「後宮が選考する際の規定は年齢が十五歳から十九歳までだから」、二十歳になっていた孫美人は一歳ごまかさなければならなかったと説明している。<sup>(17)</sup> そうすると、「選進了後宮，全家都說她定要當皇后的。她天天夢著萬歲宣召她，天天打扮得這樣好，五十多年了」とあるから、十歳そこそこで後宮に入ったことになる。したがって、「五十多年」は間違いで「四十多年」に直すべきだ、と主張している。

しかし、劇本は現在まで一貫して「五十多年」なので、訂正の主張は通らないようだ。

ただし、昭帝は八歳で即位し、皇后は六歳であったことを踏まえれば、特別な措置がとられていた可能性が大きい。幼い年齢のうちに後宮に押込まれたとしてもおかしくはない。むしろ、昭帝は二十一歳で崩御したので、二十歳での後宮入りは遅すぎるように思える。

孫美人が王昭君に歳を尋ねて、同じ歳だとわかるとさらに生まれ月を尋ねて、自分の方が若いことを喜んでいることから察すると、幼帝が即位した時

代の後宮では、年齢に特に敏感だったと曹禺が設定したのではないだろうか。後宮に入るときに少しでも年齢が上だと将来に不利になるかもしれないので、ごまかしたということなのかもしれない。そうであれば、孫美人の鸚鵡が「あなたは若い」と言うのも、必ずしも年老いた後の徒な願望とみなさなくともよい。

年齢をごまかした理由については、差し当たり以上のようなことが考えられる。しかし、それを告白した理由となると、内的必然性からは判然としない。ただし、劇の構成上からは、次の点は指摘できるだろう。

この少し前の部分で、姜夫人が王昭君に匈奴行きを撤回させようとしたときに、王昭君が応えて「皇帝が宮人を選んで匈奴に派遣しようとしているのに、ご命令に逆らうのは打ち首ですよ」<sup>(18)</sup> と言っていた。それを踏まえて、そのやりとりを聞いたわけでもない孫美人に同じ言葉を言わせている。これは王昭君との交感を表現していると同時に、間もなくやってくる死を予告する機能も果たしていると言える。

## まとめ

人物造形が突出して優れていると評価される孫美人について、劇構成の観点を絡めて考察した。一では後宮生活の残酷体現した孫美人という従来の見方ではなく、時間の推移を止めた孫美人という見方を提示した。二では、孫美人と王昭君の「交換／交感」が劇を展開する重要点であることを示した。そして三では、一と二の補足を行った。

周知のように、王昭君と呼韓邪单于を送った数か月後に、元帝は崩御している。もし王昭君が匈奴に行かなかったとしたら、しばらくは園陵で亡き元帝に仕える生活をするようになっただろう。曹禺が創造した孫美人とは、言うまでもなく、王昭君のそうなったかもしれない未来の姿でもある。

## 〔注〕

- (1) 曹禺『王昭君』四川人民出版社 1979年 p12
- (2) 閔抗生 「談孫美人形象的創造」(『中国当代文学研究資料 曹禺研究專集 下冊』 海峡文芸出版社1995年 p566)
- (3) 陳祖美「從《王昭君》看歷史劇的傾向性和真實性的關係」(『曹禺研究專集 下冊』 p619)
- (4) 同(1) p15-6
- (5) (2) など多数。ただし、李延年は「曹禺同志《王昭君》劇本中的一些歷史細節問題」(『曹禺研究專集 下冊』 p592)において、「上陽白髮人」は特異な事例であり、それを根拠にして封建社会の暗部を非難することは説得力に乏しいという見解を記している。
- (6) 「曹禺与其新作《王昭君》座談会」(編修委員会編『曹禺、王昭君及其他』良友図書(香港)1980年)
- (7) ディケンズ(山西英一訳)『大いなる遺産(上)』新潮文庫 p103
- (8) 同(1) p18
- (9) 同(1) p17, p30
- (10) 李延年同(5) p591
- (11) 同(2)
- (12) 同(1) p18
- (13) 同(1) p26
- (14) 同(1) p16-17
- (15) 同(2) p571
- (16) 同(1) p30
- (17) 孔盈「曹禺新著史劇《王昭君》献疑」(『曹禺研究專集 下冊』 p546)
- (18) 同(1) p28